
The World of the Ise Story

amichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The World of the Ise Story

【Nコード】

N4654R

【作者名】

amichi

【あらすじ】

和歌を通じて心を交わす男と女を描く恋愛物語。

伊勢物語のストーリーに自分なりの解釈を入れて作った話です。

和歌などの翻訳はビギナズ・クラシックス様の解釈を参考にしています。

第三段 ひじき藻（前書き）

伊勢物語を書いた話です。特に古典に興味のある方や受験生に、また偶然にも立ち寄った方にも読んでもらえたらうれしいです。

第三段 ひじき藻

昔、ある男がいた。

東の五条通り。男はその通り沿いにある屋敷に向かって歩いていった。

その屋敷の西の対。彼女はそこにいる

あの時 彼女を垣間見たときから何度ここを訪れただろうか。何度見ても飽きることはない、玉のように美しい女の姿。その姿が頭から離れない。

しかし、彼女は藤原氏の娘であり、私のような身分の者など会うことは許されない。ただ遠く、垣根の隙間から垣間見るしかなかった。

だが、今日は違う。男は屋敷の前に着いた。

「これを西の対のお方に……」

屋敷の者に彼女への贈り物を渡す。それには文を添えていた。

会えなくても、文を交わすことはできる。

男はもと来た道を辿って屋敷から去った。

これで私の思いが雫ほどでも伝わればいいのだが

屋敷の西の対。女は所在無さげに庭園を眺めていた。すると、侍
女がやってくる。

どうやら私への贈り物を届けに来たようだ。

贈り物の袋を開いて中を見ると、そこにはひじきの藻が入っていた。女は贈り物に添えられた文を開いた。

思ひあらば 律の宿に 寝もしなむ ひしきものには 袖をしつ
つも

文には滑らかな字で歌が書かれていた。女は自然と顔をほころばせた。

なんて風流な歌なのでしょう

女はまだ見ぬ男の姿を、歌とひじき藻を通して思い描いた。

4

もしもあなたに私を思う気持ちがあるのならば、
つたの葉が生い茂るような荒れ果てた家でもきつと共寝をしまし
よう。

たとえ、夜具の代わりに着物の袖を敷いて寝るとしても…。

第三段 ひじき藻（後書き）

どうして男はひじき藻を贈ったか
ひじきもの（夜具） 〓 ひじき藻
贈り物にちなんだ和歌を添えたため

第四段 去年も今年も変わらないのに…

睦月の十日頃、男はいつものように五条通りのあの屋敷の西の対にやって来た。

そこに行けばあの彼女ひとがいると思っていた。

しかし、彼女はいなかった。

どうして…。男は西の対を見回した。しかし、彼女の姿は無い。

あれから何日も続けて訪れたが、結果は同じだった。そして、男は予想していた最悪の事に思い至った。男は自分の屋敷に戻る。そのときはすでに日は西に沈み、空には月が昇っていた。

彼女は藤原氏。娘を天皇の后にして政權を握る一族だ。

男は月の見える部屋に入る。そして力なく膝をつく。

彼女はとうとう入内してしまったのだ。

男は泣いた。

無理だと分かっていたのだ。彼女はいずれ天皇の后になる運命だと知っていた。

なのに愛してしまった。

男は泣いた。

こうなることを覚悟していたのに…。

こんなにも胸が痛む。

男は泣いた。月が西に沈むまで。

その日からつ辛い日々が続いた。かつて彼女がいたところに何度も足を運んだ。

春は梅や桜、夏は蛍、秋は紅葉、冬は雪。そこにあるのは、かつて彼女を際立たせていたものたちだった。今となっては何の意味も無いものだった。

彼女に会いたい。その思いは日に日に募るばかり。しかし彼女はいまや雲の上。男のような身分では会うことも、見ることもできない。

そして睦月の梅の盛りに男は西の対にやって来た。

彼女のいない西の対の庭園には梅の花が見事に咲いていた。しかし、男の目にはなぜだかくすんで見える。上品な香りも今では薄れているように感じる。

その日の夜、男はつたの葉が生い茂る荒れ果てた屋敷に一人で臥せった。満月の光が差し込み、あたりをほんのり照らす。

月やあらぬ 春や昔の春ならぬ わが身一つは もとの身にして

彼女のいない世界はこんなにも色が無い。

東の空が白んできた頃、男は泣く泣く帰っていった。

月は去年と同じではないのか。春は去年と同じではないのか。私の身は変わらないのに、月の光も梅の花も去年とはまったく違うもの

に見えつつも。

第五段 童の崩した築地は・・・(前書き)

この話は第四段よりも以前の話です。

第五段 童の崩した築地は・・・

男は何度も東の京の五条あたりの女のもとに人目を忍んで通っていた。人に見つからないようにするには、正面から行くことはできないので、子供が壊していった築地ついでから通っていた。

しかし、男が屋敷を出入りする姿は、たとえ人目を忍んで通っていたとしても次第に近隣の人の噂となってしまうものである。屋敷の主人がその噂を聞きつけたのか、ある時男が屋敷を訪れると、屋敷の周りには見張りが置かれていた。

男がその後女のもとへ行こうとするも、見張りが毎夜置かれていて会えずじまいとなってしまうことが続いた。

たった数日会わなかっただけなのに

男の目の奥が憂いを帯びる。その思いはいや増すばかりである。

男は女に和歌を詠み、西の対に投げ入れた。

最近、あの方の文が来ない

東の京の五条あたりの女はふと思った。しばしば文を送ってきた人であったため、このようにぱったりと文が途絶えてしまおうと思わず気にかけてしまう。

ふと庭園を見ると、梅の木に何か紙のようなものが掛かっていた。女は侍女に頼んで取りに行かせる。どうやら文のようだ。ゆっくりと開いてみると、そこにはあの風流な歌を詠む人の歌が一首書かれていた。

人知れぬ 我が通ひ路の関守は 宵々ごとに うちも寝ななむ

その歌で、女は屋敷の周りを見張りが付いていることを知った。

あなたはずっと私のそばにいたのですね

なぜもつと早く気付かなかつたのだろうか。女は心を痛めた。それを見た女の兄たちは、見るに見かねて主人を説得し、見張りを解かせた。そしてまた男と女は会うことができるようになった。

この話は、二条の後のもとに人目を忍んで通っていたのが噂となつたので、後の兄たちが同じ男性として男の情熱に打たれて、男を守つたつと云う話である。

人に知られない私の恋の通り道にいる関守よ、どうか毎晩寝てしまつてほしいものだ。

そうすればあなたに会いに行けるのに…。

第五段 童の崩した築地は・・・（後書き）

築地＝泥と土で固めた塀。崩れやすい。

関守＝関所の番人

第六段 芥河

むかし、こんな男がいた。

男は女に何年にもわたり求婚し続けていた。しかし、彼女は男にとつては到底手に入れることのできない高貴な人であった。求婚し続けていても手に入れる可能性はゼロに近い。

そして意を決して女を盗むことにした。夜も深くなって辺りが非常に暗くなった頃、男は多くの目をかいくぐってやっとのことで女の所へと辿り着いた。

女は大層驚いていた。突然目の前に現れた男は、長年自分に求婚をしてきた男であった。その彼から外へ一緒に行こうと迫られた。

彼女は男には嫌悪を抱いていなかった。むしろ好感を持っていた。

この方とだったら、外の世界に行ってみたい

女は、大切に育てられていたために、屋敷の外から出たことがなかった。彼女の心の内が外の世界への好奇心でいっぱいになる。そして、差し伸べられた男の手をとった。

夜が深く更に天候も思わしくなかったため、辺りはいつも以上に暗かった。男と女は芥河という河のほとりまで来た。

あれは、なんですか？

女は草の上にある露を見て男に言った。しかし、男は追手を気にしながら道を急いでいたため、その問いに答えることが出来なかった。

天候が悪くなってきた、雷が鳴り、雨が激しくなってきたため、男は道中に建っていた荒れ果てた蔵の中に女を押し入れた。そして、

男は弓と矢をもって戸口でを守っていた。その中に鬼が潜んでいた事は知る由もなかった。

ますます雷が激しくなってきた。

ああーっ！！

戸口の中から女の叫び声上がる。しかし、男は絶え間なく鳴る雷の轟音のためにその声に気づかなかった。

早く雨がやみ、夜が明けてほしい・・・。

男は辺りが明るくなるまでそう思い続けた。

夜が明けて、男は蔵の中に入った。しかし、居るはずの女はいなかった。男は力なく膝をつく。

白玉か なにぞと人の問し時 露とこたへて 消えなましものを

男は取り乱して泣き続けるが、なんの意味もなく虚しく時が流れるだけであった。

あれは、真珠ですか？何ですか？とあの人が尋ねた時に、あれは露ですよと言って夜露のように儚く消えてしまえばよかったのに・・・私は虚しく一人とり残されてしまったよ

この話は、男が二条の后を盗み出していったのを、兄の堀河大臣たる藤原基経と太郎国経の大納言が内裏に参内する途中で引き返して

男から取り返したということ、鬼の仕業と言ったのであった。
まだ二条の后がたいそう若く、身分もそれほど高くなかった時のこ
とであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654r/>

The World of the Ise Story

2011年10月8日19時59分発行